

新入会員氏名(昭和45年9月1日~9月30日)

維持会員		日光 清	〃	〃	水島製鉄所
味の素(株)	中央研究所	渡辺 博	〃	〃	岩貞 一三 石川島播磨重工業(株)
大和製衡(株)		羽池 勁	〃	中央研究所	梅村 享志 大同製鋼(株)
正会員		坂輪 光弘	〃	東京研究所	藤原 忠義 神鋼々線鋼索(株)
和住 宏	木更津工業高専機械工学科教官	青島 衛	〃	釜石製鉄所	大津 茂信 (株)神戸製鋼所
浜野 文男	(株)エフプロダクション企画制作	草野 祥昌	〃	室蘭製鉄所	松原 格 〃 東京支社
青島 勇	東北大工金属加工文部教官助手	高橋 紀夫	〃	〃	萩原 康嶺 〃 中央研究所
大庭 幸夫	金属材料技術研究所	金子 侃司	住友金属工業(株)	山口 喜弘 〃	大神 正彦 〃
樫原 昌夫	(株)日本製鋼所室蘭製作所	伊藤 恒男	〃	和歌山製鉄所	川辺 壮一 〃 加古川製鉄所
白井 堯	日新製鋼(株)	綿田 弘	〃	中央研究所	勝見 良平 川崎製鉄(株)
佐々木慶夫	久保田鉄工(株)	谷口 寛	〃	和歌山製鉄所	水島製鉄所
小宮山徹郎	日本ステンレス(株)	村田 耕作	〃	鋼管製造所	学生会員
金本 通隆	直江津製造所	小泉 孝	〃	〃	関山 定男 東京工業大学金属工学科
西尾巳喜男	新日本製鉄(株)	山形 建男	〃	小倉製鉄所	佐藤 健一 東北大学工学部金属工学科
神戸 三男	堺製鉄所	村上 陽一	〃	〃	安部 伸継 早稲田大学工学部金属工学科
野呂 克彦	〃	大西 守孝	〃	〃	外国会員
竹之下賢一	〃	小林 肇	〃	〃	Prof. Julian Szekely U.S.A
	〃	木屋 隆昭	〃	〃	D.W.R. Haysom Canada
	〃	宮本 立三	三菱製鋼(株)	〃	B. J. Lee Korea
	〃	藤井 昭明	東洋鋼板(株)	〃	John L. Young U.S.A.
	〃	竹中 順一	川崎製鉄(株)	〃	
	〃		長崎製鋼所		
	〃		下松工場研究所		

書 評

鑄鋼・鑄鉄(鉄鋼工学講座 9)

荒木 透 編著

本書はI. 鑄鋼技術とII. 鑄鉄との2篇から成る。つまり鋼と鑄鉄の鑄物の諸性質と製造技術とを一冊にまとめたものである。

わが国での鑄物の生産も逐年増加し、最近では鑄鋼で約100万トン、鑄鉄で約500万トンの年間生産量を示し、ソ連、米国に次ぐ世界第3位の座を占めている。また材質的には特に鑄鉄の分野で顕著な発展があり、強靱鑄鉄、なかでも球状黒鉛鑄鉄の開発は鑄鉄技術に革新をもたらしたことは繰り返すまでもないことである。

さらに製造技術面からは、鑄鋼での大型電気炉またはLD転炉溶解による大型製品の鑄造とか、鑄鉄での従来慣用されてきたキューボラから低周波誘導加熱溶解炉への転換などの溶解関係から、さらに造型技術に至っては各種方式の自硬性鑄型の技術が相次いで開発され、またFS法のような流動性型砂を利用する技術も実用されてきている。さらに鑄物工場の機械化、計装化、自動化、省力化などによる合理化も推進され、遠からず多くの工場では様相が一新されるものと思われる。

こうした背景のもとで、鑄鋼、鑄鉄に関する基本的な内容を鉄鋼工学講座の中の一冊としてどのように盛るかは、企画する人の考え方でかなり違うものと思われる。

ところで本書では鑄鋼と鑄鉄に関して組織、物理的性質、機械的性質、溶解法、鑄造方案、鑄型、鑄造欠陥、熱処理、溶接など全般に亘って詳しく懇切に要領よく解説されている。学生、技術者に順序よく必要知識が得られるよう配慮されたことがよくうかがえるべき栄えである。著者は宮崎勢四郎、草川隆次、牧口利貞、尼木敏雄、近藤賢治の5氏であり、いずれも第一線で活躍されている権威者ばかりである。本書により鑄鋼鑄鉄をよく理解できる方々ができるだけ多いことを期待し、学生、研究者、技術者各位に本書を推薦したい。(相山正孝)

(A5版, 285ページ, 定価1900円, 朝倉書店)

正 誤 表

鉄と鋼, 56(1970)11, S643中の式を下記のごとく訂正いたします。

(誤) $F_w^* = -\alpha \cdot P + \alpha' \cdot \left(C + \frac{1}{1-r} C \right)$ (15)

(正) $F_w^* = -\alpha \cdot P + \alpha' \cdot (C - (1-r)C)$ (15)